



清流みずほ幼稚園の教室で園児たちが自由に遊ぶ様子。木の無垢材による遊具は、子どもたちが自在に組み立て形を変えることが出来るのが特徴だ。同園では「可塑(かそ)性」つまり子どもたち自身の手で変形できる遊具を重視して積極的に取り入れている。これにより子どもたちの自由な発想を生み出し、創造する能力を育てるのだ。

静謐な環境の中で 想像力を最大限に尊重し 自主性を最大限に尊重し



教室にある積み木も、シンプルな形を自在に組み合わせて遊ぶ

岐阜県瑞穂市の北部、長良川の支流である犀川のほとり、のどかな田園風景の中に建つ清流みずほ幼稚園。ここには、ゆったりとした自然環境の恩恵を謳歌するかのごとく、子どもたちが伸び伸びと学び、遊んでいる姿がある。より良い教育環境を整備し、先進の手法を実践している幼稚園として、全国から、はたまた海外からも観察に来る教育関係者が後を絶たない。東京大学名誉教授で教育学の第一人者、佐藤学氏も「ここには静謐な環境がある。まさに指すべき環境であり、これが子どもたちの頭を良くするんです」と高く評価している。こうして注目される、同園の教育環境、手法とは、結論を端的に表すと、愛情の中で子どもたちが健やかに成長することを願い、子どもの自主性を最大限に尊重していること。加えて、安心して過ごせるようあらゆる配慮に満ちていることだ。どの教室も壁とかーテンは、母親の胎内を連想させ穏やかな気持ちになるような



組み合わせを考える中で、子どもの脳と身体が健全に育つ

優しいピンクの彩り。照明も適度な明るさを保ち、見るもの全てが優しく映る。子どもが泣きわめく様子はこの園では皆無と言つていい。次の行動に移るときは、チャイムを鳴らすのではなく先生が歌を歌つて子どもたちの行動を促している。感覚を育む芸術教育を主保育としてカリキュラムは曜日によって変わる。そこで決して子どもたちに強制することはない。自主的に体験したい子どもだけがその体験を行うし、同じ時間に自由に遊んでいる子も。例えばお絵かきなどの際には、まず先生が歌いながら楽しそうに描き始める。すると興味を持った子どもの好奇心が刺激され、自分の意志を持つて同じように絵を描くようになるというわけだ。これは、幼児が大人の行動をよく観察し忠実に模倣するといつ性質を利用した教育手法なのである。こうして子どもたちの意思と行動力が培われていくのだ。

教室内では子どもたちが自由闊達(かつたつ)に遊べるよう、遊具にも工夫が見て取れる。サクラやシラカバなどの無垢材でできた積み木、羊毛できだ人形、蜜蜂の粘土やクレヨンなど。これらは子どもたちが直接手に触れるものだからこそ、自然素材でできた安心・安全な



Seiryu Mizuho Kindergarten

天然素材が子どもを育てる

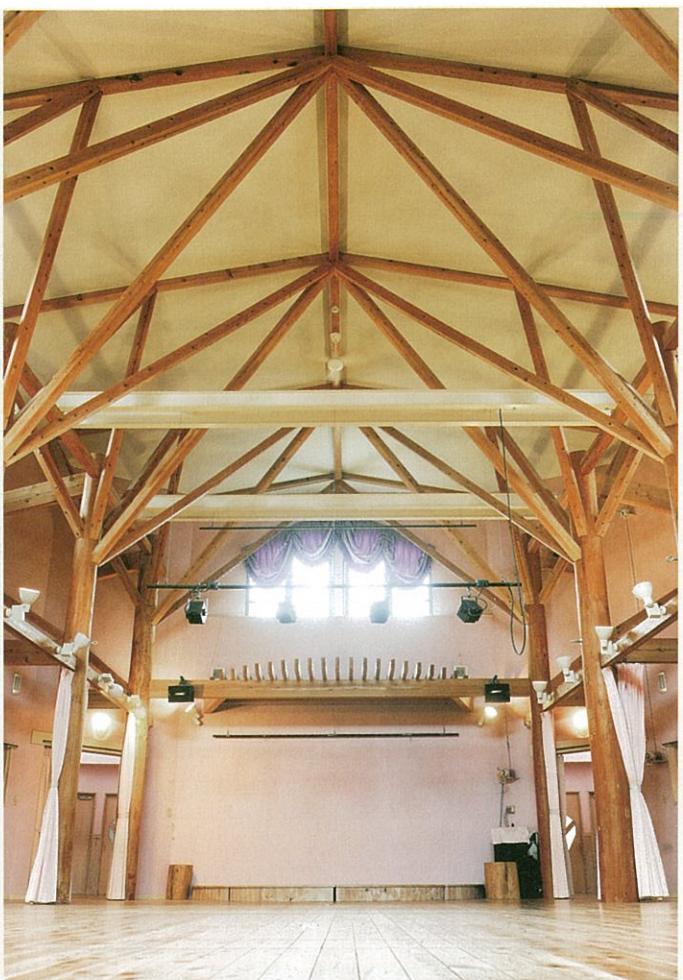
～幼稚園の先進の教育手法に学ぶ～

子どもを育てるにあたって、天然の木や土といった素材に幼少期から触れさせることは、アトピー防止など健康面にいいという点ばかりでなく、脳や身体が健やかに育つために重要なことが説かれている。

そんな考えを教育に取り入れ、実践している先進の幼稚園が岐阜県内にある。

具体例から天然素材が担う役割を再評価し考えていきたい。





Seiryu Mizuho
Kindergarten



園舎は高気密・高断熱建築で造られ、冬は薪ストーブの暖房だけで園内全体を均一に温めている（一部必要に応じてエアコンも使用）。エネルギー浪費を避け、環境に配慮した結果だ



壁は珪藻土塗り、または炭入りの漆喰塗りを採用。どちらも非常に優れた日本古来の建築塗り壁材で、吸放湿性が高いため建物内の湿気を快適に保ってくれるばかりか、臭いや有害物質を吸着する役割も果たす

岐阜県内産間伐材の建物は
安心・安全に配慮しながら
かけがえのない「木育」の場

子どもたちを健全に育てる環境づくりにおいて特に重要なのは、教育の箱となる園舎である。同園においてホールなど建物の珪藻土や漆喰を使用。建物だけでなく、教室の机や椅子などといった家具類も同様で、家具職人による造作である。長い時間を過ごす教室の床や壁に天然の木を使うことは、シックハウス症候群の防止となる。特に園児の健康を考え上で、輸入材では輸送の際に使われる防腐剤や防虫剤など、身体に影響のある薬品が使われているのではないかと不安が残る。そのため、同園では岐阜県産材にこだわり、山林へ赴いて目で見て確認した上で購入したという。もちろん自然の木特有な見た目の温かみや手触り、香りが、心をリラックスへと導き、伸びやかな雰囲気を醸していることは言うまでもない。

同園がユニークなのは、建築コストを抑える目的で、間伐材を使用したこと。節が目立ち歪みも出やすい間伐材は、一般的にあまりいい木材とされないが、ここではそれを逆手に取つての教育、「木育」に役立てている。歪んだり、傷ついたり、割れたり…。そういった天然木の特性は、木が生きているからこそ。園児たちと一緒になつてメーテナナンスをすることで、かけがえのない物を大切にする精神を育んでくれるのだ。



上：楽器や教材、道具も木や羊毛、蜜蜂などといった自然素材を使って先生が手作りしたもの。芸術活動を通して感性や想像力が高められる



下：園庭の遊具も全て無垢の木など自然素材のもの。四季を感じる園庭で運動感覚や平衡感覚が育っていく



A photograph showing three young children, likely of Korean descent, wearing traditional blue school uniforms with white collars and red cuffs. They are seated around a table covered with various wooden blocks and clay pieces, appearing to be engaged in a craft or construction activity. The child on the left is reaching out towards the others. The background shows shelves with more wooden items.



の遊具が随所に配備されていることがわかる。ユニークなのは、竹馬や竹ぼっくりなどの昔遊びも採用していること。日本の伝統的な遊びの中にも、健全な身体と想像力を育てるのに役立つものがあると見ているからだ。

一方、教室には絵本も含めて活字のあるものはあえて置いていない。早すぎる知育は健全な発達を妨げることもあるため、園では文字教育を行わないという。代わりに先生が民話や昔話を読み聞かせる。じっと耳を澄まして話を楽しんできた子どもたちが、卒園後に初めて文字を覚えていく際、自分で物語が読めるようになつたことに感動を覚え、逆に活字に深く親しみ、本好きな子に育つと評される。いる。急かすことなくじっくりとふさわしい時期を待ち、適確な年齢において教育を施すこと、その子の個性や可能性が最大限に伸びていく。頭ではなく五感を使うこと、で感性を養い、健全に育ちゆくための土台を、この幼稚園生活の中で作り上げていくのだ。

ものを、という配慮である。無機質なプラスチックではない、温かみのある天然素材は子どもたちの心を優しくすることに加え、想像力を膨らませる効果があるという。積み木などの道具は使い方を限定することなく、組み合わせに よって無限に形を生み出してくれるからだ。



メンテナンスが必要な木の家だからこそ教育の場にふさわしい

清流みずほ幼稚園園長の加納大裕さんは、約30年前、最初はドイツやフィンランドといった欧州の教育環境づくりを手本に学び、その手法を取り入れた結晶として04年に同園を開園させた。特に県産の間伐材を使った園舎は画期的なものだった。加納さんは当時振り返って語る。間伐材を使うことによって、少しでも山の環境保全



清流みずほ幼稚園 園長
加納大裕(精一)さん

に役立てないかと。そこで私はより一層の安全性を確認するため、実際に木材の生産地に見学に行つたんですよ。奥の方まで入つて行くと、100年杉の大木が現れました。……あまりの大きさにため息が出ましたね。圧倒的な存在感は畏敬の念を抱かせ、生命力がすごい。これを子どもたちにも感じさせてあげたい!』と。そんな森の生命力は現在園舎に丸太の柱となつて宿っている。園児たちは抱きついで頬ずりし、音を聞くと安心感を覚えるとい。

岐阜県で県産材を積極的に使った家づくりを行っている白木建設株式会社の代表、白木裕輔さんは加納さんの考え方と共感し、娘さんを同園に通わせた保護者のひとりだ。「子どもは大人に比べ、体積比にして5~8倍も空気を吸うというんです。しかも大人より低い床に近い位置で呼吸しています。もし床に有害なものを使っているところで生活すると、アトピーや小児喘息などを発症してしまつ危険性も。だから私たちが家づくりを行う上でも、流通経路がはつきり分かるものを使いたい。理事長も同じような考えをお持ちでした」。こうして二人の交流は深まつていった。



白木建設株式会社 代表取締役
白木裕輔さん



清流みずほ幼稚園
〒501-0303 岐阜県瑞穂市森557
TEL:058-328-7228
<http://www.lieberrystyle.com>

校ぐらにかけて新しい家を建てるど、将来親元を離れてても家に帰つてくる確率が高くなるそうです。特に木の家では、お父さんと一緒にデッキを塗装するとか、お母さんと一緒にフローリングにワックスを塗つたとかいう体験を通して、家を守らなければならぬという考え方方が定着するから。私たちも、家を作る際に障子を提案することは多いです。するとお客様が心配するのは、子どもが破りませんか?ということがあります。私たちも、家を作る際に障子を提案することは多いです。するとお客様が心配するのは、子どもが破りませんか?ということがあります。でも逆に幼少期に障子と触れ合った経験のあるお子さんに「は、障子は破っちゃいけないものだ」という認識が生まれます。仮に破つたとしても、年末に一緒に貼ればいいじゃないですか?木の家はメンテナンスに一定の手間がかかるけれども、子どもの情操教育に大いに役立ち、家族の絆も深まり、結果永く住める家になるのです。そんな共通認識による子育への思いが、二人の会話からうかがえるようだ。



園児たちのおひるごはんの風景。茶碗と皿は陶器のもの、椀は滋賀県日野町でかつて栄えた近江商人の文化「日野椀」を復刻させたもので、職人による漆塗りである。幼少期から本物に触れることで、子どもたちの感性を養っていく



おひるごはんは雑穀米のご飯と有機野菜を中心とした和食。肉類は使用せず、タンパク質は大豆で摂取

Seiryu Mizuho Kindergarten



園内の石窯は、天然酵母のパンなどさまざまな調理に使用できる。再生可能なエネルギーとなる薪を使用することで、環境にも配慮した設計だ



敷地内にある農園も園児たちの食育の場。土に触れる畠仕事を通じてより自然に親しむことができる。野菜が育つ過程を体感したり収穫を経験することで、食に対する興味も刺激される

有機野菜と雑穀米を使ったこだわりのおひるごはんで、体感する食育を目指す

子どもたちお待ちかね、おひるごはんの時間。ここでは食事にも他の保育施設とは一線を画す配慮がなされている。地元農家と提携した有機野菜や雑穀米を使った和食中心のメニュー。中には敷地内の「こども有機農園」にて子どもたちが収穫した野菜や果物が盛り込まれることもある。調理は、専任の栄養士の指導のもと、全て園内で行われている。調味料も自然食だけ薄味にして、食材が持つ本来の味を引き出していることが特徴だ。旬のものをいただくことで、季節による食材の移り変わりも学びながら、自分たちの口の中に入つてからどうなるかも語り合う。体感しながらの「食育」が行われるのだ。

ちなみに食器にもこだわりあり。一般的な保育施設ではアルマイトやプラスチックなど割れない食器を使用するが、同園では陶器の茶碗や皿を採用。漆の椀や箸まで、全て作家による手作りだという。土や木から作られる本物の温かみを感じ、もし落として割れてしまったとしても、教師が寄り添い「大切なお皿が割れてしまったね。大切に両手で持とうね」と声をかけ、物を大切にするという意識は子どもの中でも、かけがえのない経験として心に刻まれるだろう。